

〈報告〉

第一回 文書館ウィーク実施報告

伊 藤 一 晴

はじめに

文書館ウィーク発案の経緯

山口県文書館は平成十一年四月に開館四十周年を迎える。これを契機に当館では平成十年度、従来行ってきた普及活動を改組し、広く県民に文書館という施設、またその業務の重要性を知ってもらうために、「文書館ウィーク」と題する普及事業を行った。今回はこの試みの発案から実施までを振り返り、その成果と問題点を確認する。

山口県文書館において従来行われてきた基本的な普及事業は①古文書講座、②月間小展示、③歴史講座の三つである。

①古文書講座は基礎・活用・専修という三つの講座を設け、それぞれ一般初級者・小中高教員・一般中上級者を対象に、文書館所蔵の近世文書を中心として読み進めていくものである。基礎講座は年毎に県内各市町村に会場を定めて行い、活用・専修講座は文書館と複合施設となっている図書館内の研修室で行ってきた。②月間小展

示とは、月毎にテーマを決めて文書館所蔵の文書・記録を数点展示するものである。但し当館には展示室が無い。そのため文書館入口に平面型展示ケース二台を置き、五〜六点程度の文書・記録を展示している。③歴史講座とは、文書・記録を通して地域の歴史に対する理解を深め、併せて文書・記録保存意識を高めることを目的とした講座である。毎年県下二市町村において各三講座ずつ開設し、講師は外部研究者と当館研究員が分担した。講座の内容は各市町村の地域性を考慮した上で企画し、又県外の研究者を積極的に招くことにより、他の機関の歴史講座との差異化を図ってきた。平成四年度から始まったこの歴史講座は、参加希望者も多く好評であったが、各市町村で行われるため、文書館主催という印象が薄くならざるをえない面があった。

以上のように各普及事業は参加希望者が多くそれぞれ好評であった。しかし一方で文書館側が真に狙いとする、

公文書をも含めた文書・記録保存に対する呼びかけ、さらにはその大前提となる文書館に対する一般県民の認知度アップへと、必ずしもつながっていたとは言いがたい。このような現状と、折からの厳しい財政事情のもと、諸行事の見直しによる効果的な行事計画樹立の必要性から、平成九年秋段階で従来の普及活動の見直しを図られることになった。

当初の計画

この見直しの結果が「文書館ウィーク」の開催である。これは従来散在的であった③歴史講座を、文書館施設を利用することにより固定化し、併せて展示・レファレンス等を集中的に開催することで、より一層の普及効果を狙いとしたものである。

つまり、従来の普及事業では各講座が会場・時期ともに散在して行われてきたため、各講座間の関係が薄く、また文書館自体を会場とすることが少なかったため、県

民に文書館の存在を十分アピールしにくいという問題を有していた。「文書館ウィーク」とは、これらの問題を一週間という短期間で集中的に、文書館施設及び文書館所蔵の文書・記録を利用することにより解決し、文書館という施設とその機能を広く県民にアピールしようという試みである。このような考えのもと、平成九年秋の段階では次のような計画案が作成された。

(1) 特別講演会 全国の見地からみた文書・記録保存の重要性と歴史研究等をテーマとし、著名な歴史学者・文化人を招聘した一般県民対象の講演会。

(2) 特別展示 文書館閲覧室を使用し、当館が所蔵する国指定重要文化財・県指定文化財や大型の絵図など、通常閲覧が困難な文書・記録の全容を公開する。

(3) 歴史探究講座 右記(2)特別展示に関連した解説並びに当館所蔵の文書記録を利用した研究成果を紹介する講座。

(4) 文書館講座 「公文書館法と文書館」「古文書の整

理と保存」「古文書の取り扱い方」「毛利家文庫の特色について」等々、文書館実務解説や当館研究員の研究成果の発表など、文書館活動そのものに関する講座。対象は一般県民及び市町村歴史資料保存機関職員。

(5) 古文書なんでも相談 古文書の保存や内容に関する一般からの質問・相談に当館研究員が助言・回答する。日常のレファレンスとは別に期間を設け広報し、集中的に対応するとともに、文書館施設を広く一般にしらしめる。

文書館ウィーク開催時期は各古文書講座と他機関の催事とのバランスを考え、一月中下旬を予定した。また当館は通常土曜日の午後、及び日曜日は閉館しているが、ウィーク時は特別に開館することにした。

計画の変更

平成十年度に入り、さらに具体的に各講座の内容を検討する中で、いくつかの修正すべき点各館員から指摘

【別表】第一回文書館ウィーク日程

第一回 **文書館ウィーク** 1999.1.21~27

1月21日(木) 初心者のための古文書一日講座 <当館専門研究員>

9:30~16:30/県立山口図書館第1研修室 <事前申込>

1月22日(金) 特別展示① 9:00~17:00/県文書館閲覧室

毛利家文庫遠用物一・中世一

歴史探求講座① 広島女子大学教授 秋山伸隆先生

「文書館の中世文書を読む―原文書の大切さ―」

14:00~16:00/県立山口図書館第1研修室 <事前申込>

1月23日(土) 特別展示② 9:00~17:00/県文書館閲覧室

大内版法華経板木(国指定重要文化財)

特別講演会「日本の中世社会を考え直す」

歴史研究者 網野善彦先生

14:00~16:00/県立山口図書館レクチャールーム

1月24日(日) 特別展示③ 9:00~17:00/県文書館閲覧室

正保周防国絵図・正保長門国絵図
(9:00~13:00) (13:00~17:00)

歴史探求講座② 東亜大学教授 川村博忠先生

「江戸幕府の国絵図事業と防長の国絵図」

14:00~16:00/県立山口図書館第1研修室 <事前申込>

1月25日(月) 古文書なんでも相談 <当館専門研究員>

26日(火)

27日(水) 9:00~16:00/県立山口図書館第1研修室 <事前申込>

- 趣 旨 山口県文書館は平成11年4月に開館40周年を迎える。これを契機に、文書・記録から得られる様々な歴史文化情報を広く一般県民に提供することを目的として、文書館所蔵の文書記録を特別展示・各種講座開設などによって集中的に紹介する。あわせて、一般県民を対象とした古文書の保存・利用に関する相談会を実施することによって、県民に親しまれ、利用される新たな文書館を目指した普及活動の展開を図る。

- 主 催 山口県文書館
- 後 援 山口県地方史学会・山口県文化財愛護協会
- 開 催 日 平成11年1月21日(木)~27日(水)
- 会 場 山口県文書館
山口県立図書館レクチャールーム・研修室
- 参加方法 <事前申込>先、行事案内の申込先は右記のとおり
- 参加料 無 料

申込先・問い合わせ先: 山口県文書館
〒753-0083 山口市後河原150-1
TEL (0839)24-2116
FAX (0839)24-2117

実施状況
以上のような計画変更を経て、文書館ウィークは平成

された。
最も大きく変更されたのは、(4) 文書館講座である。この講座は一般県民及び市町村歴史資料保存機関職員を対象とし、文書館実務を中心とした講座内容を予定していた。しかし一般の受講希望者が少ないことが予想され、また一方で県民からの古文書講座開催の要望が強いため、「初心者のための古文書一日講座」と称する古文書講座に変更した。但し、従来文書館で行っている古文書講座との差異化を図り、文書館所蔵の古文書・行政文書等の実物を使い、文書・記録保存の観点を重視した「古文書の種類・取り扱い方」を設け、講義全体の約半分を充てることとした。(4) 歴史探究講座は当初一日二講座、計四講座を計画していたが、講師への対応を考え、一日一講座、計二講座へと変更した。



【写真1】初心者のための古文書一日講座の様子。



【写真2】講座の後半、展示物を前にして行った歴史探求講座①の様子。

十一年一月二十一日から二十七日までの一週間実施された(別表)。事前申し込みが足りない特別講演会を除き、各講座とも年末には申込者数が定員を超え、満員の状態で当日を迎えることとなった。

「初心者のための古文書一日講座」は、午前中に「古文書の種類と取り扱い方」と称して、文書館所蔵の中世・近世文書及び近代公文書等の説明、またそれらの文書・記録の形態、そこから得られる情報、またそれらを保存することの重要性を、実際に文書・記録を前にして講義する形式をとった。そして午後には「古文書を読んでみよう」と称して、文書館所蔵の近世文書をテキストとし、その解説を主として行った。受講者が「古文書の種類・取り扱い方」の講義をどのように受けとめるか不安があったものの、講義終了後のアンケートではむしろ好意的な意見が多かった。

「歴史探求講座」では二日目に広島女子大学教授秋山信隆先生に「文書館の中世文書を読む」—原文書の大切

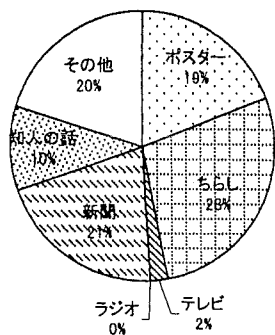
さ—、四日目に東亜大学教授川村博忠先生に「江戸幕府の国絵図事業と防長の国絵図」とそれぞれ称して御講演いただいた。同時に行われた「特別展示」では、この講座に併せて文書館蔵の中世文書及び正保周防・長門国絵図をそれぞれ展示し、講演の後半には各講師に展示物を前にして御説明いただいた。各講座とも県立山口図書館研修室を使用し、定員三十名で行った。会場とした研修室が狭く、受講希望者の多さに関わらず受け入れできなかったことは反省点として挙げられるが、実際に文書館所蔵の文書・記録の前で御説明いただくという、少人数ならではの試みは大変好評であった。

特別講演会は網野善彦先生を迎えて「日本の中世社会を考え直す」という演題で御講演いただいた。会場には県立山口図書館レクチャールームを使用した。定員は二九〇名であったが当日は三〇〇名を超える受講者が来館し、客席は満員であった。網野先生も予定時間を超えて熱弁をふるわれ、来館者の感想も極めて好意的であった。

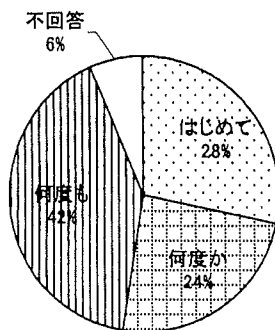


【写真3】満席となった特別講演会会場。

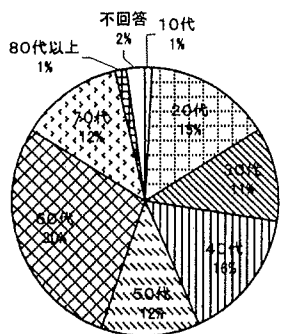
【表1】「文書館ウィークの行事を何でお知りになりましたか」に対する答え



【表2】「これまで、山口県文書館にお見えになったことがありましたか」に対する答え



【表3】ウィーク中来館者の年代構成



【写真5】文書館ウィークポスター



【写真4】古文書何でも相談の様子。

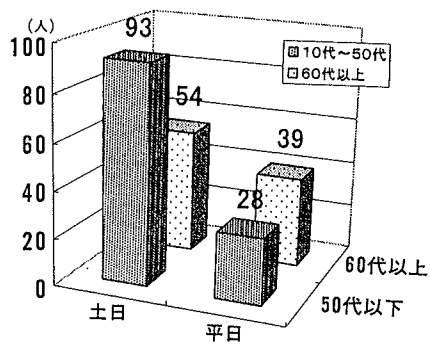
五日目から七日目まで行った「古文書なんでも相談」は事前申し込み制をとった。この結果、一日五件程度の申し込みがあり、当館専門研究員・研究員が二人づつ組み、相談者に対応した。但し、「古文書なんでも相談」の記事が新聞に掲載されたため、事前に申し込みのなかった人々からの問い合わせが日に二〜三件届くようになり、行事終了後の一週間程度、このような相談者の来館が相次ぐ結果となった。

まとめと今後への展望

このウィーク中の来館者に自由意志でアンケートに答えてもらった。この結果の一部を示すことで当初の目的をどの程度達成できたのか、また課題は何かをまとめ、今後の指針としたい。

まず、「文書館ウィーク」と称して集中的に広報活動した効果であるが、アンケートに答えてもらった方の約半数近くが、「ポスター」「ちらし」という従来には無かつ

【表4】土日・平日各アンケート解答者数



た広報活動の効果により来館している(表1参照)。文書館ウィークと称して各普及事業を統一し、諸行事の予定を一紙にまとめた「ポスター」「ちらし」を配布したことで、より多くの人に文書館という施設をアピールできたことが窺える。

ついでアンケート回答者の約三分の一が文書館に初めて来館したという人々であった(表2参照)。このことは当初の目的である、「広く県民に文書館という施設の存在をアピールする」という点から振り返れば、ある程度目的を達成できたといえる。

また、五十代以下の来館者と六十代以上の来館者の数を比較すると、全体では六十代以上の人々が総来館者数の約半数を占める(表3参照)。しかし土曜・日曜に限ると五十代以下の人々が平日と比較して三倍以上来館し、六十代以上の来館者数を大きく凌いでいる(表4参照)。この結果は土曜・日曜しか時間がとれないが、できれば参加したいと考えている県民が少なからず存在すること

を示している。また今回の試みは、そうした人々にも来館の機会を与えることができたという点で評価できる。

また内容に関してはどうかであろうか。ここではアンケート中の自由記述欄から、いくつかの声を紹介する。

・年休使って来たかきがありました。まず文書の大切さがわかりました。文書を解説するのもおもしろかったですし、文書から当時のことがいろいろわかるのもおもしろかったです。

(二十代・男性、「初心者のための古文書一日講座」参加)

・普段閲覧が難しい史料をゆつくりと閲覧することができ、よかったですと思います。

(二十代・女性、「歴史探究講座①」参加)

・だれでも入りやすくなった点で良くなったと思います。

(三十代・男性、「特別展示②」観覧)

・古文書の種類・取扱がよくわかりました。家に有る

のですが大切にしていないので反省しました。

(七十代・女性、「初心者のための古文書一日講座」参加)

以上のように概して好意的な感想が多かった。また「受講者数を増やしてほしい」「展示期間を長くして欲しい」といった要望も多く見られた。

このように今回初めて開催した「文書館ウィーク」は、来館者にとつて有意義な行事となった。また当館にとつても当初の目的の通り、文書館という名を広く県民にアピールし、また文書館という施設を利用するきっかけを与えることができた。

反省点を挙げるとすれば、それは文書館という施設の機能とその重要性まで来館者に訴えることができなかつた点であろう。つまり山口県文書館が「古文書を多く收藏している施設」であるだけでなく、公文書をも含む文書・記録を、未来に残していく役割を担った機関であること、またその重要性が、来館者に十分伝わったとは言

い難い。また、文書・記録等の保存の重要性を広く県内に周知させるといふ点から振り返れば、結果的に市町村に出向く回数が減ったことは再検討を要する問題点であろう。

但し、依然として文書館に対する一般県民の認知度が高いとはいえない現段階では、現代の公文書をも含む文書・記録を、未来に残していく役割を前面に打ち出して、インパクトは弱くならざるをえない。よって県民に文書館の存在をアピールした上で、文書館としてのメッセージを送らなければならない。今回の試みはそういった点で第一段階であり、文書館としてのメッセージをいかに効果的に発信していくかが今後の課題といえよう。